

愛すること信ずること

夫婦の
幸福のために

三浦綾子



愛

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

愛すること 信ずること——夫婦の幸福のために

昭和42年10月30日 第1刷発行 ©

定価 320 円

検 印
廃 止

著 者 三 浦 綾 子

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社 講 談 社

東京都文京区音羽 2-12-21

電話 東京 (03) 942-1111

振替 東京 3 9 3 0

印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 若 林 製 本 工 場

Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえします。

まえがき

週刊誌「女性自身」に八回連載した「妻の茶の間から」というわたしの随筆は、意外に反響が多かった。この切りぬきを持って嫁いだという若い女性、夫婦でいく度か読み返したという主婦、これを読んでおけばよかったという結婚に傷ついた旅館の女中さん、その他未婚の若い女性、三十過ぎたいわゆるハイミスの女性など、巾広い層から好意ある、お便りをいただいた。

ちょうどその頃、講談社のかたから、一冊の本にまとめたら、という話があった。読者の中からも同じ希望がいくつかあったので、単純なわたしは、自分をもかえりみず、すぐにその気になってしまった。

ところが、一篇六枚のものが八篇だけでは本にはならない。さらに二十五篇書きたすこととなった。生来のんきなものだから、一日に一篇ずつ書けば、一ヵ月でできあがるだろうと思った。ところが手をつけてみると、とても思ったとおりにはいかない。ほか

に連載ものを二、三抱えていることもあったが、全篇妻の立場で書かなければならないというのは、まことに容易なことではなかった。

しかもわたしは妻として失格の人間である。しかし悪妻は悪妻でも、妻にはちがいない。そう自分にいい聞かせて書きだした。

だが途中で、またちょっと考えた。妻といっても、わたしには子供がいない。同居のしゅうともいない。しゅうとや、小じゅうとに悩まされた経験など、何ひとつない。余りにもいい人ばかりだ。夫のことは言うに及ばずである。

（困ったなあ）

とわたしは思った。週刊誌連載の八篇はまあまあとして、こんなわたしが書くものなど、いったい何のおもしろみがあるだろうか、自信がなくなった。しかし、こんなおんきな妻のいることも、またひとつの話の種だろうと、勇をふるって書きつづけてみた。

この中には、以前あちこちに書いた随筆に、手を加えたものも少しはいつているが、とにかくどうやら総計三十三篇がまとまった。

途中、身体が悪くなったりして、約束の期日までにはとうていできあがらず、担当の

藤井和子さんには、ずいぶんとご迷惑をおかけした。

書いているうちに、わたしは、夫婦というものの、人間というものについて、つくづく考えさせられることが多かった。人間はこうも弱いものか、こうも変わりやすいものかと、いく度思ったことであろう。

「三浦さん夫婦の仲のよさは、ちょっと類がない。博物館にでも飾っておきたい」

朝日新聞の、わたしの小説を担当してくださっている門馬義久さんが、こう言っていて、いく度もわたしたちをひやかしたことがある。

たしかにわたし自身、夫婦仲のよいのを自認してはばからなかったのだが、この本の書きあがる頃には、そんな気持ちはふっとんでしまった。もっと心して夫に尽くさなければならぬと、自戒するようになったのだ。

それだけでもこの本を書いた意味があったと、つたない随筆集ながら、いまわたしは、わずかに自分を慰めている。

一九六七年初秋

三 浦 綾 子

目次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

わたしたちの結婚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

天の録画

わたしたちの新婚旅行

馬には乗ってみよ

マイナスの体験から学んだもの

悪妻の見本

着物とわたし

妻の心遣い……………47

鳴らずのバイオリン

家庭は裁判所ではない

男は弱し

馴れるということ

何気ない会話からえるお互いの理解

ほめられること、ほめること

共通の目的があるかないか……………85

たとえ泥棒の夫でも

忘れえぬ夜

「あなたにはかなわないわ」といえる妻の幸せ

夫婦だって他人よ、という考えかた
性生活のない夫婦の愛情

心の奥にあるもの……………117

愛するということと、愛すること
顔と心

心の隙を埋めるものは

民子さんの一生

夢とわたし

お気の毒さま

処女無価値論について

「売れ残り」という言葉を忘れよう

夫婦の周辺……………165

わたしの実家論

ババアぬきとは何ぞ

子なきは去るか

「まさか」わたしに限って

鬼ばあといわれる女、善良だといわれる男

おわりに……

197

この頃のわたしたち夫婦の一日Ⅰ

この頃のわたしたち夫婦の一日Ⅱ

いつの日か最後となる

装
画
本文
插画

畦地
梅太郎

わたしたちの結婚



天の録画

わたしが三浦と初めて会ったのは、昭和三十年の六月十八日であった。その朝、中庭のただ一輪のバラが花を開き、何かいいことのあるような、美しく晴れ渡った日であった。その時、わたしは療養十年めで、ギブスベッドに仰臥の身であった。

三浦は、キリスト教誌「いちじく」の誌友で、旭川に誌友は彼とわたしとただ二人だけであった。その「いちじく」誌を出しておられる札幌の菅原豊先生が、三浦に、わたしを見舞ってほしいと葉書を出された。

三浦は、何日かためらってから、わたしを訪ねて来たのである。話しあってみると、旭川営林署に勤めている三浦と、啓明小学校に勤めていたわたしたちは、いく度か出勤の途中に、会ったことがあるのではないかということになった。なぜなら、彼の勤めて

いる管林署は、わたしの家から二、三町の所にあり、彼はわたしの家の前を始終通っていたからである。

けれども、わたしは七時半までに出勤しなければならず、三浦は八時までに出勤していた。わたしの勤め先は、半道以上の所にあったから、七時には家を出なければならぬ。

三浦がわたしの家の前を通るのは、八時十分前くらいであったという。もし、二人がちょうど同じ時刻なら、東へ行くわたしと、西へ行く三浦が、必ず顔を合わせたはずなのに、時間がちがうばかりに、同じ道を歩きながら、一度も会ったことがないことになる。

しかし、もしも天から神様が、わたしたちの通う九条通りを眺めていたとしたら、いったいどう思われたことだろう。わたしが通りすぎた後、数十分ほどして三浦が通るのを、ニヤニヤしてごらんになっていたかもしれない。

「あの二人は、将来夫婦になるのだが、かわいそうに、いましばらくのしんぼうだな」
特に、三浦がわたしの家の前を通り過ぎるのを、神様は意味ぶかく眺めていらっしや

ったかもしれない。

ところで、わたしの家の土台上げで、昭和二十五年の夏、わたしは、新旭川の叔父の家の二階に部屋を借りていた。この新旭川に三浦が住んでいて、その叔父の家の前も、三浦は必ず朝夕は通っていたのである。

その頃も、わたしは療養中だったが、やや小康を得ていた。だから、朝に夕に叔父の家の近くを散歩していた。

「昭和二十五年の夏頃だったかなあ。二度ほど、長いスカートをはいた、目の大きな印象的な女性に会ったことがある。何だかいまだに心に残っているのだが、あれが綾子じゃなかったかと、思うんだがねえ」

三浦は、結婚をしてから、よくそんなことを言った。たしかに、わたしはその頃、長いスカートをはいていた。その頃なら、朝に夕に叔父の家の前を通った三浦と、一度や二度、会ったことがありそうな気がする。

もし、わたしたちの一生が、神によって、テレビのビデオのように録画されているとするならば、神に頼んで、そのテープを借りて、映写してみたいものである。すると、

意外にも、将来結婚する二人は、映画館の入り口ですれちがったり、同じ列車に乗りあわせていたり、食堂での席がすぐ真近だったりしたことが多いかもしれない。

三浦がいうところの「印象的な女性」も、写してみると、それはわたしではなく、全く別人だったりするかもしれない。

三浦がチラリチラリと「印象的な女性」に目をやって、通り過ぎてから振り返って眺めている姿などが、写し出されるかもしれない。そしてそのようすを、このわたしが窓から眺めて、ニヤニヤ笑っているかもしれない。

ほんとうに、自分たちの過去の姿が、微に入り、細にわたり、克明に録画されていて、それを「何年何月頃の姿」と、随意に写すことができたなら、さぞおもしろく便利であろう。一番便利なのは、裁判官かもしれない。神に、

「何某の、何年何月何日の録画をお貸しください」

と、裁判官が願う。すると神は直ちに貸してくださる。てっきりこいつは犯人だと思いきや、いこんでいたところが、彼はその頃どこかの奥さんと、ホテルでよろしくやっていた、などということになるかもしれない。アリバイがあいまいであったわけである。

こうなると、がんくつ王のような、残酷な運命はなくなるし、あの帝銀事件や松川事件や、その他いろいろの納得できない事件も、たちまちにして解決することだろう。だが、夫婦間のことになる、これはちょっと困るかもしれない。

結婚しようと思う相手の、録画を写してみたところ、混んだ電車の中で、女の子にいたずらをしていたとか、道で拾った千円札をネコババしていたとか、親とケンカばかりしているとか、そしてまた、ボーイフレンドとキスをしていたとかいうことに、なりはしないだろうか。

お互い人間である。どんなに自分は天地に恥じない人間であると自負してみても、心の中まで録画されてしまっている、やはり人様の前に、その自分の姿をさらけ出すわけにはいかないのではないか。

いかにも実直そうな顔をしていても、その心の中には、色情もあれば、嫉妬もある。憎しみもあれば怒りもある。録画というのは正直なものである。まして天の録画ともなれば、自分の気づかぬ心の動きまで、克明に写し出されることだろう。

もし、天の録画があれば、こんな便利なのがないかもしれないが、一方やはり、ど